

本音で話せていますか？

テレビ番組の話題で恐縮ですが、年末にドラマ「ひきこもり先生」を見ました。38歳から11年に渡ってひきこもり生活を続けていた主人公・陽平が中学校の非常勤講師となり、学校で起こる様々な問題に悪戦苦闘しながらも奮闘する姿を描いています。今回は第2弾ということで、2年振りに学校に復帰した陽平でしたが、以前にも増して校内の雰囲気は重く、そんな矢先に学校の近くでホームレス襲撃事件が起こります。生徒（ヤングケアラーの役として描かれています。学校を取り巻く課題が凝縮されています）が関わっていたことが判明して、職員室は修学旅行を自粛するかどうかで揺れていました。市民からの苦情や、受験を控えた時期でのコロナ感染の拡大を恐れた保護者の意見で、修学旅行は中止になりましたが、保護者会が終わって「言いたいことは我慢しないで言ってい」と訴える陽平に、生徒たちは「やっぱり修学旅行に行きたかった」と本音を明かします。中止に合わせて校内に捨てられたいくつものダイヤルキー。解錠の数字は「2020」。入学してから何もかも我慢してきた学校生活。修学旅行に行くことで中学生の思い出を取り戻したいという願掛けでした。今これを書いても切なくて涙が出るシーンです。

生徒たちは表面的にはおとなしい。教師の指示にも素直に従う。自分の意見や気持ちをあまり口にしない。ドラマで描かれる生徒の様子を、浜高生に重ねてみている自分がいました。赴任してから3年生、2年生全員と校長室で面談をしました。短い時間ではありましたが、進路のこと、勉強のこと、部活動のことなどを話してくれました。本当ならできていたはずのことができずにいるのに、不満もほとんど言わずに前向きな考えを話す生徒に安心する一方で、何となく言葉にはできない気持ちが残りました。ドラマの中で修学旅行を中止すべきという意見を言う大人の考えは、一校を預かる身としては痛いほどわかります。しかし、中学生あるいは高校生という時間は、大人が考える以上に生徒の成長には大切な時間であり、当たり前に行われていたことができなかったことの喪失感が「言いたくても言わない」につながってはいなかったのか。話を聞いてくれない大人を前に子供たちは「話す」ことを諦めてしまったのではないかと自問しました。

ドラマの最後で、生徒たちは陽平の後押しにより、商店街を装飾して大きなテントを建て、自分たちで「修学旅行」を実現します。クラス皆で取り戻したダイヤルキーは「2022」にセット。自分たちの力で「2022」年に進むことができたのです。

3年生の皆さん、ガマン我慢の生活にも関わらず、今日まで元気に通ってくれてありがとう。そして、卒業おめでとう。浜高は、生徒が自分たちの力で進んでいけるよう後押しする場でありたいと思います。今日まで生徒の成長を見守ってくださって保護者の皆様、心からお祝い申し上げます。そして、物心両面から本校を支えてくださっている地域の皆様方、今後も変わらぬご支援をよろしくお願いいたします。

令和5年（2023年）2月 浜高だより第159号 校長 三井 智和